

試水内 かわら版 95

現在の水質

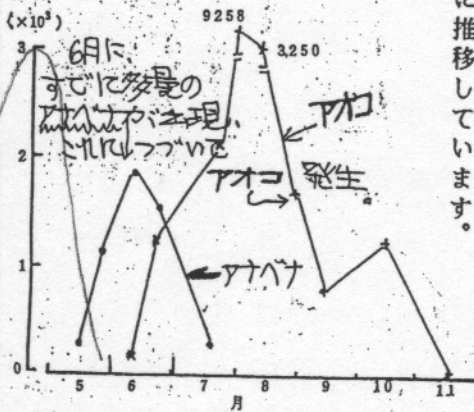
茨内水試団

6月の水質は、今後9月頃までの水質を左右するという点から極めて重要な意味を持っています。たとえば、アオコの大発生のおつた昭和48年には、冬から6月にクロステリウムという緑藻が出現冬の湖を緑色に変えていました。このクロステリウムは、水温上昇にともない6月下旬に一変に枯死しました。このとき湖の酸素が減少し、魚のへい死がおこるとともに湖底から窒素やリン等の栄養が溶けだし、以後のアオコの大発生を促進したものとみられています。又昨年の夏季にアオコの大発生が見られた北浦では、6月中旬には、アノバノが2000ヶ/m¹も出現していました。

現在の霞ヶ浦のプランクトンは、珪藻のシネドラ（針珪藻）が最も多く、これに顕微鏡で見ると青竹のように見えるフォルミジウムという藍藻が混じっています。勿論、今後の気象条件にもよりますが、比較的好ましいプランクトンが出現しているといつてよいでしょう。

こうしたプランクトン出現状況を反映して、湖水の有機物量、又、汚染の指標でもあるCOD（化学的酸素要求量）は、湖心6.0（昨年7.2）、北浦の白浜でも6.4（昨年同期10.0）と若干低目に推移しています。

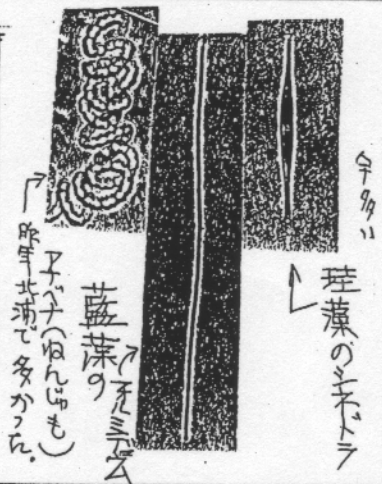
昨年北浦(馬渡)のプランクトン



フォルミジウム

項目	木原	湖心	白浜	馬渡
透明度 cm	100	110	90	70
水温 °C	19.4	18.0	21.1	21.1
水素量 ppm 上下	8.8	8.0	9.7	10.8
PH	6.4	7.8	6.1	5.5
CO ₂ ppm	8.7	8.1	9.0	9.6
塩素量 ppm	6.0	6.0	6.4	8.5
TP	59.1	60.7	62.5	48.0
TN	0.85	0.56	0.64	1.20
TP	0.066	0.044	0.062	0.078
chl. a	47.5	26.7	46.7	152.9

5/17.18



改善飼料、

もう一つの効用

網生す養殖負荷量削減対策の一環として、低タンパク・高カロリー飼料を開発してきました。このことよって、負荷量は、大幅に削減されていますが、この改善飼料は、網生す漁場内の溶存酸素量を節約するという点でも重要です。魚は、エサを摂取すると、通常の2~3倍の酸素を消費します。とくに摂取から6時間ぐらいたまの間に酸素のとり方が上昇します。ところが、脂肪を添加した飼料では、この酸素のとり方が、減少し、10%添加では、3割減、20%添加では半分となります。網面数がかみあっている漁場では、酸素量を節約し、好条件を自ら作り出すという点からも改善飼料は、すぐれています。